



Data 2021-152

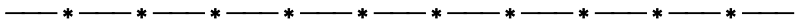
監督：ドミニク・モル
 脚本：ドミニク・モル/ジル・マル
 シャン
 原作：コラン・ニエル
 出演：ドゥニ・メノーシェ/ロー
 ル・カラミー/ダミアン・ポ
 ナール/ナディア・テレスツ
 イエンキービッツ/バステ
 イアン・ブイヨン/ヴァレリ
 ア・ブルーニ・テデスキ

👁️👁️ みどころ

東京国際映画祭で観客賞と最優秀女優賞をゲット！セザール賞でも脚色賞と助演女優賞を！

『エマニエル夫人』や『アディル、ブルーは熱い色』（13年）等、美女たちの同性愛をテーマにしたフランスの名作は多いが、さて本作は？とはいえ、それは伏線。この物語は、ある女性の殺人事件から始まる。黒澤明監督の『羅生門』（50年）は「羅生門方式」として有名だが、その方式に沿って1つの事実を複数の男女の目で追っていくと・・・？

5章構成の原作を交響曲と同じ全4章にまとめた本作は、第3章で転調するほか、第4章「アマンディーヌ」で更に大きく転調！アマンディーヌって一体誰？そこで描かれるネットを駆使した“ロマンス詐欺”の実態とは？こりゃ面白い！こりゃ必見！本作から見えてくる人間の本性とは・・・？



■□■ 2019年東京国際映画祭で観客賞と最優秀女優賞を！ ■□■

本作は、本場のフランスで脚色賞と助演女優賞（ロール・カラミー）を受賞したほか、2019年の東京国際映画祭では観客賞と最優秀女優賞（ナディア・テレスクウィッツ）をゲット！コラン・ニエルの原作「Seules les Bêtes」を得意のスリラー劇に仕立て上げた鬼才がドミニク・モル監督だが、寡聞にして、私はその原作も監督も全く知らなかった。

しかし他方で、黒澤明監督の『羅生門』（50年）で有名になった「羅生門方式」を私はよく知っていた。これは、同じ出来事を複数の人物の視点からスクリーン上で語っていくことによって、その違い（対比）を浮き彫りにしていく手法だ。本作の章立てのタイトルにされているのが登場人物たちの名前であることを考えると、本作に見る羅生門方式の重視ぶりがよくわかる。なるほど、これは面白そう。しかして、本作はスリラー劇？さらに、

本作は悲劇？それとも喜劇？

■□■第1章「アリス」に見る殺人事件(?)と人間模様は?■□■

第1章「アリス」と題された本作冒頭は、夫のある女性アリス(ロール・カラミー)が一人暮らしの男ジョゼフ(ダミアン・ボナール)の家を訪れるシークエンスから始まる。しかし、近時の邦画のような状況説明は全くないので、この2人の人物像も人間関係も全くわからない。したがって、突然この2人の“情事シーン”がスクリーンに登場してくると、ビックリ!

しかし、その後、アリスには牧牛業を営む夫のミシェル(ドゥニ・メノーシェ)がおり、病気の父親と3人暮らしをしていることがわかるから、導入部から、それぞれの人間模様は不安定だ。さらに、テレビからは、アリスたちが住んでいる南仏のコース高原で、パリからやってきたエヴリーヌという女性が車だけを残して行方不明になっているというニュースが流れてくからサスペンス色もたっぷり。そんな状況下でスクリーンに登場するのが、食事にも興味を示さず、パソコンの画面ばかり見ているアリスの夫ミシェルは、どこことなく変だ。

そんなアリスの家に“聞き込み”にやってきた憲兵のセドリック(パスティアン・ブイヨン)の言葉を聞いていると、エヴリーヌの死亡(殺害?)にジョゼフの関与が疑われているらしい。そこで、アリスが翌朝急いでジョゼフの家へ赴くと、ジョゼフの愛犬が銃で撃たれて殺されているのを発見したからビックリ!これは一体誰が?ひょっとしてジョゼフとの浮気を疑っている(確信している?)自分の夫ミシェルの仕業?それならジョゼフが説明してくれればいいのだが、逆にジョゼフはアリスに対して冷淡で、家から追い帰してしまったからアレレ・・・?

■□■第2章「ジョゼフ」は“羅生門方式”で■□■

弁護士生活50年近くになると、法廷における“真実の発見”がいかに難しいかがよくわかる。争いのある事実についても、真実は1つのはずだが、10人の証人が語る事実が十人十色ということもあるし、対立する人間同士なら全く正反対の事実が対立することもある。したがって、何も黒澤明監督の「羅生門方式」はそれ自体が特別なものではないが、映画の演出方法としては特別かつ新鮮だったらいい。しかし、アリスの目から事実をとらえた本作の第1章「アリス」では、車を降りたアリスを出迎えてくれた愛犬の後ろから突然ジョゼフが登場していたが、“その事実”をジョゼフの目で見ると・・・?

さらに、ジョゼフの体験によると、ジョゼフがアリスの車を見たのは、自宅の敷地に横たわっていたエヴリーヌの遺体を発見した直後だったらいい。ジョゼフがアリスを家の中に入れた後、2人がお決まりの情事(?)に至ったのは2人で共有する事実だが、あの時ジョゼフの心が“ここにあらず”状態だったのは一体なぜ?アリスを帰した後、ジョゼフはエヴリーヌの遺体をどのように処理したの?

それが第2章「ジョゼフ」で次々と描かれるが、なるほど、同じ事実でも、アリスの目

から見た「第1章」の事実と、ジョゼフの目から見た「第2章」の事実には大きな違いが！もちろん、そこにはかなり大きな違和感もあるし、えっ、ジョゼフにはこんな趣味（？）が・・・？

■□■第3章「マリオン」では大きく転調！■□■

「この物語は、ある女性の殺人事件から始まる」。チラシにはそう書かれている。しかし、同時にそれは「・・・はずだった。」と続き、そして「偶然の連鎖で翻弄される運命を、誰が予測できただろうか」と書かれている。

しかして、第1章「アリス」、第2章「ジョゼフ」を見ていると、南仏のコース高原で、アリスとジョゼフ、そしてミシェルが絡み合う人間模様の中で、パリからやってきた女性エヴリーヌの殺人事件が勃発！この犯人は誰だ？そんなテーマが明確に提示されるうえ、憲兵セドリックの聞き取りシーンを見ていると、そういうストーリー展開が確実だと予想してしまう。

しかし、4つの楽章から成る交響曲の第3章が突然転調してしまうように、本作の第3章「マリオン」では、はじめてエヴリーヌ（ヴァレリア・ブルーニ・テデスキ）が登場し、南仏の港町セートで、20歳ほど年下の美女マリオン（ナディア・テレスキウィッツ）と濃密な情事（同性愛）にふけるシークエンスが登場するので、それに注目！フランス映画では、古くは『エマニエル夫人』（74年）シリーズ、新しくは『アディル、ブルーは熱い色』（13年）（『シネマ32』96頁）等で描かれた美しい同性愛のシークエンスが有名だが、本作のそれもなかなかのものだ。もっとも、本作では2人の関係を軽く扱う（？）エヴリーヌに対して、“2人は絶対に離れられない関係だ”と主張して、自宅（別荘）までエヴリーヌを追いかけていくマリオンとの間に“愛の濃淡”があるところがミソ。そのため、第3章の前半で観た2人の美しいセックスシーンが後半では完全に姿を消すばかりか、2人の大声での罵り合いになってくる。エヴリーヌの別荘で泊めてもらえなかったマリオンは、仕方なく閑散とした冬のキャンプ場のトレーラーで寝泊まりしていたが、金を渡してマリオンを帰そうとしたエヴリーヌに対して、マリオンは「金ではない。愛が欲しい。」と激昂することに。そんなこんな女同士の争いの末にマリオンに別れを告げたエヴリーヌは一人車でキャンプ場を後にしたが、もしこんな女同士の大声での罵り合いを聞いていた男がいたとしたら・・・？

■□■第4章「アマンディーヌ」では、さらに大転調！■□■

計5章の章立てから成る原作は、第4章「アルマン」、第5章「ミシェル」とされているらしい。しかし、本作はその4章と5章をまとめて、第4章「アマンディーヌ」としている。しかして、アマンディーヌとは一体誰？実はそれは架空の人物で、パソコンの画面上で作りに上げられた女性だ。フランス映画では、かつて植民地だったアフリカの都市モロッコを舞台にした名作も多い。古くは『カサブランカ』（42年）がそうだったし、新しくは『モロッコ、彼女たちの朝』（19年）（『シネマ49』117頁）がそうだ。さらに、『シ

ンプルな情熱』（20年）『シネマ49』121頁）も、『ヘカテ』（82年）『シネマ49』150頁）もアフリカにあったフランスの都市を舞台にしたフランスの映画だった。

しかして、本作第4章「アマンディース」の舞台は一転して、フランスから5000km離れた西アフリカのコートジボワールの旧首都アビジャンになる。そこでの、主人公はこの街でインターネットを駆使して架空の女性アマンディースを作り出し、世界を股にかけて“振り込め詐欺”を行う若者グループの中の1人、アルマン（ギイ・ロジェ・“ビビーゼ”・ンドゥリン）だ。ここで描かれる“ロマンス詐欺”の姿は実に面白い。そして、それにまんまとハマってしまい、当初支払った1000ユーロに続いて、次々と金を振り込むのが、何と第1章で見たアリスの夫ミシェルだからビックリ！彼はなぜそんなことを・・・？

第4章で展開されるアルマンと地元の娘との純愛模様（？）や一攫千金を求めての奮闘ぶりはメチャ面白いが、彼らの“ロマンス詐欺”はどんな捜査で暴露され、逮捕されるに至ったの？他方、警察から「アルマンを告訴するか？」と聞かれたミシェルは、「そんなことはしない。」と吐き捨てたうえ、自らアビジャンに乗り込んだが、そんな行動をとった彼の目的は一体ナニ？

■□■ “罪なき殺人” はチャット上の誤解（人違い）から！ ■□■

先日観た、『アレックス』（20年）は、20年前のカンヌ国際映画祭で賛否両論に湧いた『アレックス』と同じ素材を時系列に沿って編集したもの。“イタリアの至宝” モニカ・ベルッチの壮絶なレイプシーンが大問題となり、「時はすべて破壊する」というテーマが大反響を呼んだ原作を、改めて時系列に沿って見直してみると、なるほど、なるほど……。そう考えると、あえて時系列をハチャメチャにして作られた本作も20年後には改めて時系列を整えた別バージョンが登場してくるのかも・・・？

本作のパンフレットには、小柳帝氏（ライター・編集者）のコラム「10年ぶりに日本のスクリーンに帰ってきたサスペンスの名手」があり、ここでは、「この事件は、時間の順序に沿って言えば」として、時系列に沿ったストーリー紹介がされている。したがって、本件のあまりのややこしさに頭がこんがらがった人は、これを読めばいいだろう。

一昔前、パソコンが家庭やオフィスに入ってきた時、ひとりでこっそりパソコン画面に見入るおじさん達がいたが、彼らは一体何を見ていたの？それから数十年後、パソコン、ネット、チャットと時代は進歩し、今やチャット上であらゆる情報がリアル画面で飛び交っている。そんな時代状況下だからこそ、ミシェルはフランスから遠く離れた西アフリカの都市アビジャンに住むロマンス詐欺グループのアルマンとのチャットにはまり込んでいたわけだ。なるほど、パソコン画面上で見るアマンディースは魅力的な女性。しかし、彼女は一体どこにいるの？1000ユーロを振り込んだら、ホントにこんな美女と出会うことができるの？スケベ親父を美女の魅力でたらし込む方法は昔も今も、古今東西変わらないことがよくわかる。しかし、本作でミシェルはなぜマリオンをアマンディースと人違いしたの？そこらあたりのミステリー色の説明は十分ではないが、トレーラーの中でのエヴ

リーヌとマリオン（＝アマンディーヌ）とのド派手な痴話喧嘩（？）を聞いたミシェルの
その後の行動は、なるほど、なるほど・・・。

ちなみに、本作の英題は『Only the Animals』だが、それは一体なぜ？そんな謎を含めて、
本作については鑑賞後じっくり考えることが不可欠だ。

2021（令和3）年12月27日記